



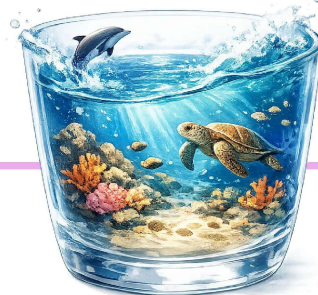
「信心とは、疑いのない心である」。そう聞かたびに、私は少し苦しくなっていました。では、この疑いだらけの私はどうすればよいのでしょうか。疑う心を消そうと、努力すればよいのでしょうか。凡夫の私に、そんなことができるのでしょうか…。



そんなふうに悩んでいたとき、親鸞聖人が信心のことを「大信海～大いなる信心の海～」と呼ばれたことを思い出しました。信心とは、私の心の話のはずです。それなのに、なぜ海なのでしょう？ しかも、ただの海ではなく、「大いなる海」です。

海辺で、小さな男の子が、コップに海の水を汲んでいます。「見て、ぼくの海だよ」。得意げに見せてくれるコップの中で、水が“ちゃぶん”と揺れています。

たしかに、それは男の子のコップの中の水です。しかし、その子が作った水ではありません。ただ、海に向かってコップを傾けたら、海のほうから水が入ってきた、それだけです。でも小さなコップの中にある水は、目の前に広がる大きな海と、同じひとつの水なのです。



浄土真宗の「信心」とは、自分で「信じる力」を起こすのではない。コップに海の水が入るように、私という器に「阿弥陀さまの心」が、向こうから入ってきてくださることを示す例えです。

だからこそ、聖人は「信心の海」と呼ばれたのでしょう。私の小さな「心のコップ」で揺れるその水も、向こうに広がる大いなる海（阿弥陀さまの心）と、同じひとつの水だからです。

梯實圓 和上のことば（『正信偈講座』）に、

信心を獲るといのは、信を獲るのではない、法を獲るのです。…
法を私の上で語る時に信というのです。

と、あります。だから、私たちは仏法を聞くのです。

私に届いてくださっている阿弥陀さまのよび声に、ただわが身を向ける。それは、大いなる海に向かって私の小さなコップ（心）を傾けることなのでしょう。

疑いを消そう、確かな心を作ろう。そうやって空っぽのコップばかりを見つめていた私に、阿弥陀さまの大信海が、すでに入り満ちてくださっていたのでした。

